ハイドン（Franz Joseph Haydn）（1732～1809）［第１回目］

以前ハイドンの解説記事をお配りしましたが、さらに詳しく３回シリーズで解説をすることになりました。ハイドンの略歴を以下に再掲しますが、第１回目の今回は、「生誕からエステルハージ侯爵家に仕えるまで」を解説します。

文責：どくとるＡ

［ハイドンの略歴］

1732年	3月31日、ウィーン南東のローラウ村に、車大工職人の長男として生まれる
1740年	ウィーンの聖シュテファン大聖堂の少年聖歌隊に入る
1749/50年頃	変声期を迎えて聖歌隊を解雇、フリーの音楽家として苦労する
1758年	ボヘミア地方のモルツィン伯爵家の楽長に採用される
1761年	ウィーンの南50キロ、アイゼンシュタットに居城を持つハンガリー貴族エステルハージ侯爵家の副楽長に採用される
1766年	楽長ヴェルナーが他界し、ハイドンが楽長となる
1785年頃	モーツァルトと親交を持ち始める
1791年	侯爵家から離れ、イギリスで演奏旅行を行う（91～92年と94～95年の2回）
1792年	イギリスからの帰途ボンでベートーヴェンと会う
1796年	再び、エステルハージ家の楽長となる（1804年まで）
1809年	5月31日、有名かつ富裕な音楽家としてウィーンで死去

［生誕からエステルハージ侯爵家に仕えるまで］

ハイドンは、1732年3月31日、ウィーン南東、ハンガリー国境に近いローラウ村に、車大工職人の長男として生まれた。のちに実家の絵を見たベートーヴェンに「百姓の掘っ立て小屋、ここであれほど偉大な人が生まれたのだ！」と、逆の意味で感嘆されるほどの環境だった。5歳になって遠縁のフランクに引き取られ音楽の手ほどきを受けた。

1740年から49年頃まではウィーンの聖シュテファン大聖堂の少年聖歌隊員として、教会のミサなどに参加し、一般の学校教育と音楽教育も受けた。ハイドンは聖歌隊の中でも花形だったが、声変わりした為にその地位を追われることになった。ウィーンの街で急に路頭に迷うことになったが、18世紀を代表するオペラ脚本家メタスタージオの家の屋根裏部屋に住み、彼の娘の音楽教師をしたり、当時のイタリア人大作曲家ポルポラの内弟子になったりと、うまく身を処することに長けていたため、次第に貴族社会との接点が増えた。また、独学で作曲を身に付け、初めての弦楽四重奏曲とオペラを作曲した。この頃からハイドンの評判が上がり始める。

1758年、ハイドンはボヘミア地方のカール・モルツィン伯爵家の楽長という重要な職に就き、この伯爵のために初期の交響曲をいくつか作曲した。その後、伯爵が経済的に苦しい状況になり、ハイドンは解雇されてしまったが、すぐに1761年、西部ハンガリー有数の大貴族エステルハージ侯爵家の副楽長という仕事を得た。

［ミニコラム：ハイドンの弟、ミヒャエル・ハイドン（Johann Michael Haydn）（1737～1806）］

兄ヨーゼフ・ハイドンの5歳年下の弟で、兄と同じように、ウィーンの聖シュテファン大聖堂の聖歌隊に所属し、1777年よりザルツブルクの聖三位一体教会のオルガン奏者を、1781年よりモーツァルトの後任として宮廷と大聖堂のオルガン奏者の職を務めた。1800年、ザルツブルクはフランス軍に占領され長い宗教国家としての歴史を終えるが、ミヒャエル・ハイドンはフランス軍から被害を被り、兄が仕えていたエステルハージ侯爵家から副楽長の地位の提供を申し出られたが、兄からの援助も受けながらザルツブルクに留まり、1806年、ザルツブルクで69歳の生涯を終えた。

ミヒャエル・ハイドンは、宗教国家ザルツブルクに仕えた音楽家だったので、ミサ、レクイエムをはじめ多くの宗教音楽を残したほか、シンフォニー、様々な楽器のためのコンチェルトなど器楽作品を残している。

Tokyo Hauptchor